

# 小平図書館友の会 会報47号



発行日 2022年5月15日  
 発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世

ネット公開版

ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>  
 Eメール [kltomonokai@gmail.com](mailto:kltomonokai@gmail.com)



## もくじ

「チャリティ古本市」今年も断念 .....	1
コロナ禍と図書館（続） 小平市中央図書館長 利光良平 .....	2
会員が読んだ本 .....	3
学習会報告 .....	4-6
図書館協議会報告 .....	6
小平市図書館の「一夜貸し」をご存知ですか？ .....	6

## 「チャリティ古本市」今年も断念

一昨年の2月、第22回チャリティ古本市の開催に向けて準備中、思いもよらぬ新型コロナウイルスの発生で中止を余儀なくされました。その後もコロナは収まる様子はなく昨年も中止。今年こそはとひそかに期待していましたが、オミクロン株の流行は高止まりとなり、あえなく断念の経過をたどっています。小平市内では知名度も上がり、毎年楽しみにして下さる方々からは「今年は開催できますか？」と聞かれる場面も多かったです。古本を購入するだけでなく、いわゆる断捨離の手段に期待されて「家に古本がたまっちゃって・・・」と嘆かれる方も多いです。

友の会では、このコロナが、近い将来、完全に収まり元の生活に戻ることはない、の見方で今後の古本市をどうするか模索しています。せっかく軌道に乗っていたチャリティ古本市ですが、「密」を絵に描いたような会場の様子では、従来通りの企画は無理というものです。しかし世の中が循環型社会へ進んでいる今、「読み終わった人から読みたい人へ」という私たちのイベントは続けていきたいと思えます。古本市世話人会を中心に「新・古本市」に向けて知恵を絞っていますので今しばらくお待ちください。



写真 2018.3.24 第20回チャリティ古本市  
 (午前中の混雑が少し緩和された会場)

\*チャリティ古本市は、市民のみなさまが読み終わった本を寄付していただき、安価で販売する好評のイベントで、21年間続いています。収益金は諸経費を引いて全額小平市図書館や被災地支援に寄贈・寄付されています。

## コロナ禍と図書館（続）

小平市中央図書館長 利光良平

友の会会報第44号に令和2年10月までの図書館の状況について載せる機会をいただきましたが、コロナ禍の状況はその後も続き、その後の期間の方がすっかり長くなってしまいました。今回再び機会をいただき、その後の状況について記しておきたいと思います。

2020（令和2年）11月

11月には休止していた小平市の図書館ボランティアの活動も順次再開する。

12月 感染者が再び増えてきて、大阪や広島などで状況が悪化する。海外ではワクチンの大規模接種が始まる。

2021年（令和3年）1月

1月1日付で市の健康推進課に新型コロナウイルスワクチン接種準備担当が設置される。都内の新規感染者数が2,400人/日を超え、1月8日から緊急事態宣言が再び発出されるが、図書館は通常開館を継続することとなる。

2月 感染者数は徐々に減ってきているが、緊急事態宣言の3月7日までの延長が決定される。

3月 3月21日で緊急事態宣言は解除される。この間も図書館は開館を維持してきた。コロナ禍の1年で、非来館型の図書館サービスとして国の交付金を活用した「電子書籍」の導入が全国で増え、導入済の自治体は1年前の94自治体から205自治体に倍増、都内でも狛江、昭島、世田谷、小金井、立川、文京、武蔵野、多摩、国立、三鷹で導入された。

4月 再び新規感染者数が増加して、4月25日から再び緊急事態宣言が発令される。市の本部決定により、図書館は4月28日から休館となるが、本の動きを止めないため、予約本の貸出窓口を12時から17時までで中央、地区館で開設した。

5月 5月7日からは予約本の貸出窓口を10時から17時までに拡大した。休館中にできることとして、オンラインイベント「かがくあそび かみであそぼう」をZoomで開催する。

6月 緊急事態宣言は延長されるものの、6月1日から開館を再開し、館内で本を選んでいただける状況になり、高齢者や子どもなどが多めに来館した印象を持つ。前年中止してできなかった蔵書点検を実施する。高齢者から2回目のワクチン接種が本格的に始まるが、図書館職員でも副反応で出勤できな

くなる人が散見された。

7月 市全体で10台程ご寄付いただいた「サーマルカメラ（自動検温器）」を中央図書館に1台配備し、読書室前に配置し行事開催時などにも活用する。7月12日から再び緊急事態宣言が発令されるが、図書館として対応の変化はない。1年延期された東京オリンピックが無観客で始まる。

8月 都の新規感染者数が5,000人を超えることもあったが、月末にかけて漸減していく。

9月 東京パラリンピックも閉会し、新規感染者数も落ち着いてくる。市議会では中央図書館に配置する図書消毒器を含む補正予算が審査・可決される。9月末で緊急事態宣言は解除された。

10月 中央図書館の乳幼児タイムを再開、ブックスタートでの読み聞かせはなかなか再開できない。

11月 コロナ禍で休止していたDVD、CDなどの視聴覚サービスを再開、おはなし会を回数や人数を限定し全館で再開した。

12月 12月25日に中央図書館に図書消毒器を1台設置する。庫内で30秒間紫外線を当てると共に下から風が吹いてほこりなども取れるタイプで近隣市にも多く導入されたタイプ。新しいオミクロン株が猛威を振るい始め海外で感染者が激増し、年末年始以降の国内での感染再拡大が予想される。

2022年（令和4年）1月

市でも3回目のワクチン接種が始まり1月21日からは「まん延防止等重点措置」が発令され都の新規感染者数2万人に迫る勢いとなる。図書館としての対応の変化はなし。

2月 都の新規感染者数が月初に2万人/日を超えるも、徐々に減っていく。

3月 まん延防止等重点措置は3月21日で解除される。図書館職員でも陽性者が相次いで確認されるが、濃厚接触者はなく通常どおり開館を継続する。

4月 コロナ禍で3回目の新年度に入る。清瀬市で電子図書館が開始される。

\*\*\*

今後について

小平市に限らず、コロナ禍以前から減少傾向の図書館の利用者数は下げ止まる様子もなく、雑誌の相次ぐ廃刊や出版の電子化などもあり、大きな変革期を迎えています。時代の変化を捉えつつどのような図書館が今後も皆様に愛される図書館になるのかを模索していきたいと思っております。

## 会員が読んだ本

竹内 洋 『革新幻想の戦後史』上・下  
中公文庫 2015.9 (親本：中央公論新社 2011.10)

佐渡出身で教育社会学を研究された著者と遠隔の談話会でお会いし、著書を数冊読んでみました。その中の一冊です。

多くの人物やデータをとりあげながら、政治家、総合雑誌、リベラリズム、知識人、教育学者、左翼運動とその挫折等、「自分史としての戦後史」が実証的に語られます。



かつて、「岩波・朝日などの進歩的文化人」が影響力を持った時代がありました。「同調集団内の忠誠競争」、「ケインズの美人投票モデル」、「私大株式会社」、「自分の一生を農村で送りたくはない」など、多くのことを再整理し明示してくれます。

ベトナム戦争がありベ平連の活動もありました。今、昭和が終わり、既に平成31年が過ぎ、令和4年になりました。昭和の時代に活躍された多くの方々の訃報を毎日のように聞きますし、浅間山荘事件は50年前のことで、名画を上映してきた神田神保町の岩波ホールは今年7月に閉館されるそうです。昭和がどんどん遠くなるのを感じます。多くの事件があった一方で、「社会運動家には元々親切な人たちが多かった」との事に共感します。

終章には、「民主主義と教育の大衆化の帰結が大衆エゴイズムであった」とあり、まったく同感です。「今だけ、金だけ、自分だけ」といわれる現在と比べると、幻想とはいえ、対局の時代の空気があったことを気づかせてくれます。

友人が、同書には「戦後の共産党や社会党のことがあまり書かれていない」と語っていたので、併せて、池上彰・佐藤優の新書「真説日本左翼史(戦後左派の源流)1945-1960」と「激動日本左翼史(学生運動と過激派)1960-1972」を読んでみました。それによって時代のマクロな流れが理解でき、ご自身の体験から展開された竹内氏のこの本への理解も深まりました。左・右どちらの立場でも、疾風怒濤を過ごす若者の将来をつぶさない責任が、先輩世代にはあるのだとの思いを強くします。

(会員 加本 実)

『帰れない山』  
パオロ・コニェッティ 著 / 関口英子 訳  
新潮クレストブックス 2018.10

コロナ禍で外に出られない日々が長く続く。満たされない日々の中で、たまたま手に取った本を紹介したい。舞台はイタリア・スイス国境にかかるモンテローザ山群の麓の村。まさに私が歩いてみたい北イタリアの高原の描写にわくわくしながら読み進めました。

主人公の「僕」ピエトロはミラノの都会っ子であるが、ドロミーティの麓の村で育った山好きの両親に連れられ少年期から青年期にかけ毎年夏を山で過ごすことになる。一家が山行を再開したはじめは、あちこちの山小屋などを泊まりながら過ごしていたが、山頂を目指して早足に登り、目的を達するやいなや脱兎のごとく下山するタイプの父と、氷河には絶対近づかず1500m位の高原でゆったり過ごすことを好む母と、山好きと言っても山への向き合い方の違いに「僕」は挟まれる。それはそれぞれの人生の生き方でもある。やがて母が手頃な小屋を見つけてグラーナ村で毎夏を過ごすようになり、村の少年ブルーノと出会い、仲良くなった。一方ある年から「僕」は父の激しい登山に付いていくようになり、自然の中でのブルーノとの交流も絡み合って語られる。山の暮らしや自然の厳しさが断片的ながら美しく丁寧に描かれ、行ったことのない地なのに懐かしさを覚えるのはなぜだろう。



「僕」は反抗期に差し掛かり父との登山をやめてしまう。さらに進学で父母のもとを離れる。村で石工となったブルーノとの交流も途切れてしまった。こうして10年が過ぎたころ、父が心臓発作で亡くなる。そしてブルーノとの再会で父の驚くべき計画を知ることになる。ここから結末までの展開はまさに引きずり込まれました。明るい夏の自然とは打って変わって、雪に閉ざされる冬の山の厳しさが後半に描かれます。

二人の少年が成長する中で変化する関係、そして父との葛藤が見事に描かれています。

(会員 久保田 文人)

## 学習会報告

### 図書館について学ぶ会 & ハンディキャップサービス学習会

#### 小平市の「図書館ボランティア」を考える

小平市の図書館ボランティア導入は平成17年度(2005年)に始まりました。その年の事業計画には「図書館の活性化と地域コミュニティ活動の推進を図るため、世代を超えた交流の場を目指した図書館ボランティア組織を立ち上げます」とあります。その後若干の文言を変えながら、令和3年度の事業計画は「図書館ボランティア活動の推進：図書館の活性化と地域コミュニティ活動の推進を図り国際化、情報化など社会の変化に対応し、多様な利用者に対する新たなサービスを展開するために、市民の社会参加による自己実現と世代を超えた交流の場を目指した図書館ボランティアの活動を推進します。」となっています。

現在の図書館ボランティアはどのようになっているのでしょうか。

図書館を支えているボランティアあるいはそれに類似する活動には二通りあり、ひとつは図書館が直接募集し、図書館の依頼・指示のもとに活動するボランティアです。もうひとつは、市民が自主的にあつまった団体との「協働」です。

#### 1. 図書館が募集したボランティア

- ① 一般ボランティア
- ② 古文書ボランティア
- ③ 情報ボランティア
- ④ 音訳ボランティア
- ⑤ 宅配ボランティア
- ⑥ 絵本でつながるボランティア

#### 2. 図書館関連の活動をしている市民活動団体

- ① 点訳サークルかりん
- ② 小平市点字サークルけやき
- ③ 布の遊具“ひまわり”
- ④ 小平市子ども文庫連絡協議会

#### 1の図書館が募集したボランティアについて

①一般ボランティアは、蔵書の中で傷んだ本や、書き込みがある本を修理します。また、おはなし会の

プレゼント作りやチラシ・パンフレットの整理も担当します。

②古文書ボランティアは、當麻家、当麻伝兵衛家の宗門人別帳の解読文の作成で、高度な専門性を持ったボランティアの存在があって実現しています。

③情報ボランティアは、NPO法人小平シニアネットワーククラブの「小平アーカイブスの会」が中心となり、玉川上水を中心とした小平に関する写真資料・ビデオ・地図などのデジタル化を担っています。

④音訳ボランティアは、視覚障がいなど文字を読むことが困難な方に対する対面朗読や録音図書(デジ図書)の作成を行います。専門の講師を招いて初級・中級の養成講座や研修会を行います。

⑤宅配ボランティアは、図書館へ来館困難な方を対象に、月1回希望する本を自宅へ届けたり回収する活動を担います。利用登録者の基準が当初より拡大した事により、宅配貸出の利用者が増えてきています。

⑥絵本でつながるボランティアは、生後3~4か月児の健康診断の折に、赤ちゃんへの読み聞かせやブックスタート本の手渡し、保護者への図書館案内などを行います。

#### 2の図書館関連の活動をしている市民活動団体について

①点訳サークルかりん、②小平市点字サークルけやきへは小平社会福祉協議会を通して点訳の依頼をします。点訳絵本(絵本に点字シールを貼ってもらう)、『ハンディキャップサービスごあんない』やハンディキャップサービス交流会の次第などの点訳を依頼します。

③布の遊具“ひまわり”は、月に2回図書館で布の絵本や遊具を制作しています。作成物は図書館に寄贈され(小川西町図書館で管理)貸し出しが行われています。以前は「拡大写本の会」でしたが、大活字本の普及により現在の活動に移行しています。

④小平市子ども文庫連絡協議会は、小平市の図書館開館よりも早い昭和46年に発足した団体です。子どもたちへよい本を届け、本に親しんでもらうための活動をしています。図書館でのおはなし会や図書館との共催で講演会、大人のためのおはなし会も開催しています。ほかにも、おはなしの会いとぐるまとして学校、幼稚園、保育園、児童館などへおはなし会の出前を行うなど、独自の活動も行っています。小平市から補助金が出ています。

このように小平市の図書館にはたくさんのボランティアや市民活動団体が図書館サービスの一端を担ったり、より豊かにする活動をしていると言っても過言ではないと思います。

では、ボランティア自身にとっての図書館ボランティアという活動はどうでしょうか？冒頭の事業計画にあるように「…市民の社会参加による自己実現と世代を超えた交流の場を目指した図書館ボランティアの活動…」はどのくらい実現しているのでしょうか。

ボランティアへの参加動機はひとそれぞれです。「社会に役立つ活動がしたい」「図書館を支える力になりたい」「技術を習得したい」「本に関わる活動がしたい」「本に囲まれていたい」「仲間づくりのきっかけにしたい」などなどです。ボランティアは基本無報酬です。しかし金銭的には「無」であっても、それに代わるあるいはそれ以上に得る何かがあるはずです。だからこそ自らの時間をボランティア活動に捧げることができるのです。

その報酬とは…。ここでは、特に図書館の募集で集まったボランティアについて考えてみたいと思います。

平成17年度に一般ボランティア募集の説明会が行われた折り、当時の中央図書館長は、「職員を刺激してください」と述べられました。この言葉は、「ボランティアは行政の下請ではなく、職員と対等であり、両者が同じ目線で、同じ方向を向いている」と理解され、応募したボランティアに活動への期待を抱かせました。事業計画そのものです。

その後十数年経ち、今現在の図書館とボランティアの関係を見てみると、ボランティア活動のすべてではないものの双方の間に少なからず齟齬が見えるものもあります。ボランティア活動に対する認識の違いや熱意の差があまりに大きくては、せっかく立ち上げた仕組みを生かすことはできません。

ボランティア活動の舞台はそれぞれ違いがあり、ひとくくりにはできませんが、図書館の活性化や多様化する図書館サービスに対応するためにボランティアの力を借りるというのであれば、『ボランティアに仕事を依頼する図書館担当者、仕事を依頼されるボランティア』の関係が、一方通行ではなく、双方向の「努力」と「協力」であってほしいと思います。それには、定期的に同じテーブルを囲んで意見交換し、活動に関する問題点を共有し、問題解決

のためお互いが胸の内をさらけ出す覚悟が必要と考えます。成熟した関係はさらに新しい発想を生むことができると思います。その際に大事なことは、ボランティア導入の趣旨と位置づけ（多様化した利用者のニーズに応えることができる図書館を作るために市民と協力していく）を職員全員が納得することが前提と考えます。

その上で、直接の募集によるボランティアにせよ、図書館に関連する活動団体にせよ、対話と交流によってともに高め合うことがボランティア導入の目的に合致するのではないのでしょうか。図書館を支える一員であると感じられる瞬間とその持続こそボランティアの報酬となりえるのです。

社会のあり様は刻々と変わっていき、情報量はとてつもなくあふれています。将来の変化に対応できる図書館サービスを展開するためにも、市民の経験や得意分野を生かすべく、ぜひ外からの風を受け止める図書館であってほしいと願います。

（剣持香世）

## YAを楽しむ会

2月の課題本の一冊は『少年のはるかな海』（作・ヘニング・マンケル 偕成社）だった。



ヨエルは、11才。母はいない。船乗りの父は、今は木こりをしている。ヨエルの夢は、父が再び海の仕事にもどること。ある夜、ヨエルは窓の外を走っていく犬を見た。ヨエルはその犬を見つけたくて毎夜一人で探し

回った。星空の下を走っていく犬を見つけられたら、願いが叶うのではないかと。

読んでいて、思わず書き留めた箇所がある。

「人がねむりにつくとは、どういうことだろう。小さな生きものが、からだの中のろうそくを消してまわる。そして、さいごの一本が消え、まっ暗になったとき、人はねむりにつく。きっと、そうだ。その小さな生きものも〈夜の民〉の仲間だ。〈夜の民〉は、夜が平和であってほしいと思う。だから、ぼくたち〈昼の民〉をねむりにつかせるんだ……。」

ひとりひとりの人格を重んじる北欧の人々、この本の中でキラキラ輝く作中の人達の想いに沢山出会った。頭の中の会話では、うまく話せても、声に出すと全然そうではなくて、実際のところ言葉は何パーセントくらい正確に伝わるものだろうか。こん

な疑問を時おり感じる私は、YA で出会う本の中で、かつて抱いていた想いが、文字になって帰ってきたり、気づかなかった相手の気持ちにハッとしたりする。そして心は、いつも良くうつる鏡でありたいと、次の本を手にする。 (杉山 登志枝)

～2021年11月から2022年4月までのテキスト～

11月26日(金)

『キャラメル色のわたし』 シャロン・M・ドレイバー  
鈴木出版社

『ボーダレス ケアラー』 山本悦子 理論社

12月24日(金)

『家族さがしの夏』 ニーナ・ボーデン 国土社

『あと少し、もう少し』 瀬尾まいこ 新潮社

2月4日(金)

Zoomで実施

欠席者が多く1月分が2月にずれ込む

『床下の古い時計』 K・ピアソン 金の星社

『エヴィーのひみつと消えた動物たち』

マット・ヘイグ ほるぷ出版

2月25日(金) Zoomで実施

『あの雲を追いかけて』

アレックス・シアラー 竹書房

『少年のはるかな海』

ヘニング・マンケル 偕成社

3月25日(金) Zoomで実施

『まぐたら屋のマリア』 原田マハ 幻冬舎文庫

『飛べないハトを見つけた日から』

クリス・ダレーシー 徳間書店

4月22日(金)

『なぜ僕らは働くのか—君が幸せになるために』

考えてほしいこと』 佳奈 学研プラス

『リマ・トウジュ・リマ・トウジュ・トウジュ』

こまつあやこ 講談社

## 図書館協議会報告

会報46号で図書館協議会(略して図書協)について報告した後、3回の会議がありました。毎回、それぞれの経験・専門知識からの発言が飛び交って、なかなか多角的で有意義な会議となっています。

図書協の会議は、報告事項と協議事項があります。報告事項は、「図書館行事等の報告と今後の予定」「図書館の貸し出し状況等の統計」など。また、市議会で出た図書館関連質問も報告されます。議員の方からの質問が多いと、図書館に注目があつまっているなど、うれしくなります。

第5回会議では、協議事項として「令和4年度小平市立図書館事業計画(案)」が提案されました。図書館協議会の承認を経て確定し、事業実施となります。図書館ホームページの「運営方針」に掲載されます。

基本方針は7項目。図書館資料の充実、歴史的資料の総合管理・提供体制の検討、レファレンス機能の充実、子ども読書活動の推進、学校図書館支援の充実、ブックスタートの実施、使いやすい図書館の運営、です。基本方針部分は、どうしても、「進めてまいります」「努めます」という文言が多くなります。「実施事業」で具体化されるわけですが、この表現について質問された委員がおられて、「なるほどなあ」と考えさせられました。

図書協終了後、今期の提言テーマについて協議。広報、電子図書、現代の地域資料収集、小川西図書館などなど、様々な意見が出されてました。提言は、2022年度末提出です。

(図書協委員 伊藤規子)



### ！小平市図書館の「一夜貸し」(特別貸出し)をご存知ですか？

小平図書館の蔵書の中で背表紙にRの赤丸シールが貼ってあるものがあります。

本来は図書館内で閲覧する参考資料ですが、「一夜貸し」のサービスを使うと閉館30分前から翌開館時の30分後まで借りることができ、家に持ち帰ることができるというマークです。休館日(金曜日)を利用すれば丸1日借りられますし、第3木曜日(連休館日)の前日からであれば3日後の土曜日の10時30分まで3泊4日で借りることができます。児童書コーナーには百科事典や図鑑類にこのRマークがあります。ぜひ利用してみてください。

\*多くは貴重な資料です。カウンターで手続き方法をお聞きください。